

くらしの中で読む『正法眼蔵』

——面授の巻—— その九

成興寺住職 小倉 玄 照

〈本文〉

釈迦牟尼仏かたじけなく迦葉尊者に付属面授するにいはく、「吾有正法眼蔵、付属摩訶迦葉」とあり。嵩山会上には、菩提達磨尊者まさしく二祖にしめしていはく、「汝得吾髓」。

はかりしりぬ、正法眼蔵を面授し、汝得吾髓の面授なるは、ただこの面授のみなり。この正当愆^{とういん}時、なんぢがひごろの骨髓を透脱するとき、仏祖面授あり。大悟を面授し、心印を面授するも、一隅の特地なり。伝尽にあらずといへ

ども、いまだ欠悟の道理を参究せず。

およそ仏祖の大道は、唯面授面授、受面授面のみなり。さらに剎法^{じょうほう}あらず、虧闕^{きけつ}あらず。この面授のあふにあへる自己の面目をも、随喜歡喜、信受奉^{ぶぎょう}行^{ぎょう}すべきなり。

道元、大宋宝慶元年乙酉五月一日、はじめて先師天童古仏を礼拝面授す。やや堂奥を聴許せらる。わづかに身心を脱落するに、面授を保任することありて、日本国に本来せり。

正法眼蔵 面授

爾時、寛元元年癸卯十月二十日、在越宇吉
田峯吉峰精舎ニ示衆。

〈現代語私訳〉

釈迦牟尼仏は、尊くありがたいことに迦葉尊者に眼から眼へ一切を伝えて仰せになった。

「わたしのいのちの本質（正法眼蔵）は、すべて摩訶迦葉に伝え了った」と。またそれが中国に伝えられて、嵩山の修行道場にあつては、菩提達磨尊者が二祖慧可に向つてはつきりと「汝は、わたしの真髓をものにした」と言われた。

これらのことから推量するに、いのちの本質たる正法眼蔵を師から弟子に伝え、或いはいのちの真髓を弟子に得させるのも、すべては面授によるのであり、面授以外にはそれは不可能である。まさにその機が熟するに及んで、なんじのふだんの精進修行の自負心がさらりと抜けおちた時、仏祖から仏祖に面授され伝えられてき

たものが面授されるのである。大いなる悟りを面授し、いのちの本質を面授するのであるが、からだのほんの一部が特別の意味を持つていてということだ。もちろんそれですべてというわけではないが、さとりに欠けたところがまだあるのではないかとそれを求める努力をする必要はない。

およそ仏祖の大いなる道は、ただ面で授けて面で受ける、（表現を換えれば）面を受けて面を授ける、ということにつきる。それ以外には余分の法はないし、それで何も欠けたものはない。このような面授に出合うことのできた自己の誇りに満ちた顔をありがたく思つて大いに歎び、大事に修行生活を続けなければならぬ。

わたくし道元は、大宋宝慶元年乙酉五月一日、はじめて今は亡き先師天童如浄古仏を礼拝し、面授を得た。その後、特に親しく室中に入つて指導を受けることを許された。かくして、いさ

さか身心すつきりとし、面授の重みをたしかなものとして保ちつつ、日本の国へ帰って来た。

正法眼蔵 面授

その時、寛元元年十月二十日、越の国、吉田県吉峰精舎にあって衆に示した。

迦葉の面授、慧可の得髓

摩訶迦葉は、梵語マハーカーシャパ(Mahākāśyapa)の音写です。マハー(摩訶)は「大」という意味ですから、大迦葉とも言ったりします。迦葉は姓です。

釈尊の時代のインドの大国マガダ国(摩揭陀)の首都ラージャグリハ(王舎城)の近在のバラモンの家に生まれたと言われています。バツダー・カピラーニー(拔陀迦毘羅)と結婚したが、同衾することはなかったと伝えられています。そしてついには、妻と共に出家し、釈尊の弟子と

なりました。十大弟子の中では、頭陀第一と称せられました。頭陀行というのは、あらゆる執着を捨ててひたすら仏道を修行することです。衣は糞掃衣(捨てられた布を活用)。食は、常に乞食によるものを一日一食。住も樹下露地等を転々として過ごします。「頭陀第一」ということは、つまるところ、釈尊の説かれた修行法を忠実に実践する点においてこの人の右に出る者はいなかったということです。それゆえに、迦葉尊者は、釈尊のいのちの本質(正法眼蔵)を正しく受け継がれたと禪門では信じられているのです。

中国の第一祖達磨尊者は、伝えられたいのちの本質を二祖慧可大師に伝えられました。そのありようを、『景德伝灯録』等によってみてみましょう。菩提達磨がある時、門人たちに現在の境涯を尋ねます。門人道副の所見は、

「文字にとらわれず、文字を離れず、しかも

大いなる道の用をなしている」

というものでした。それに対して達磨は、

「汝は、吾が皮を得た」

と評しました。次に尼僧の総持は、

「東方世界の阿閼仏の国土を慶んで見たのに、

その後再びそこを見たことがないというようなところか」

と。達磨は、その答について

「汝は、わが肉を得た」

と評しました。次に、道育が言いました。

「地水火風は、もともとと空であり、色（物質）
や肉体）・受（感受作用）・想（表象作用）・行
（意志や記憶）・識（認識作用）も、存在するもの
とは言えない。それゆえに、私の見るところ
は、一切何も得るところは無いとでもいうべき
か」

達磨は評して言った。

「汝は、わが骨を得た」

と。最後に、慧可は、ねんごろに礼拝を三度
行じた後に、立つべき位置にすくと立った。
それを見て達磨は言った。

「汝は、わたしの髓を得た」

と。これによって慧可は二祖として認知された
と伝えられています。達磨のいのちの本質は慧
可に伝えられたのです。

このエピソードの読解は相当にむずかしい。
道元禅師は『正法眼蔵』葛藤の巻で、

「達磨さまは、四人に対して、皮・肉・骨・

髓と、それぞれに異なったからだの部位を示し
て評価を与えたのだが、いずれも祖師の道に添っ
ているのである。四人の門人は、それぞれに立
派な生き方であり、達磨さまの説くところをちゃ
んと聞いている。その聞くところ、或いは会得
したところは、ともにさすが身も心も打ち込んで
修行する者の皮であり、肉であり、骨であり、
髓である。身や心に関して一切のこだわりを離

れた皮肉骨髓である。自分の浅はかな判断で祖師の生きざまを誤ってはならない。問答のあれこれの断片的表現では十分にはわからない点があるのである。

それであるのに、正しい修行を努めていない連中は、四人それぞれに述べたところに浅深があったので、達磨さまもそれに見あうように皮肉骨髓をあてて評したのだと考える。つまり、皮や肉は、骨や髓に比較して軽く、表面的だと考え、二祖慧可の見解がきわだって優れていたから「髓」を得たという。このように考えるのは、いまだかつて仏道修行の何たるかを知らないものであり、正しい修行に身を任せていないものである。」

と述べておられます。修行の程度を皮肉骨髓によってランク付けしたものではないというのです。皮肉骨髓のいずれをとってみても達磨さまの身心そのものであって、真髓とか皮相とか

いう俗な表現にまどわされてはならないのです。

面は人間関係の要

ところで皮肉骨髓などという身体の一部を取り上げて、身心の全貌を象徴させることが可能なのだという「葛藤」の巻における道元禅師の見解は、ではなぜ「面授」が特別に重視されなければならぬのか、という疑問を私たちに抱かせます。達磨さまに対する二祖慧可の場合も、礼拝すること三度^{みたび}、その後、定位置に立ったというのですが、礼拝のたびに立ち上がって慧可は達磨さまの「面^{かお}」を見る、定位置にすつくと立ってまた「面」を見る、そのことをとても重視しておられるように窺えます。「唯面授面受、受面授面のみなり」という表現は、皮肉骨髓もさることながら、いのちの相続においては、「面」がすべてであるという印象を受けます。

この点については、かつて高校の国語教科書で読んだ和辻哲郎の『面とペルソナ』というエッセイを思い出します。たしか、全文が教科書に収載されていたように記憶しますから、とても短い文章です。その説くところは、「人」を表現した肖像彫刻が破損してトルソーとなった場合は「断片」と化すが、胴体から離れた首は「人」を表現して胴体や手足までイメージさせることが可能だという問題提起をまですす。そして伎楽面や能面を例に上げて次のように言います。

「人を表現するためにはただ顔面だけに切り詰めることが出来るが、その切り詰められた顔面は自由に肢体を回復する力を持っている。そうしてみると、顔面は人の存在にとって核心的な意義を持つものである。それは単に肉体の一部分であるのではなく、肉体を己に従える主体的なるものの座、すなわち人格の座にほかならない。」

そして、西洋でも、劇に用いられる面を意味したペルソナが、転じて劇におけるそれぞれの役割を意味し、さらには劇中の人物をさす言葉になると指摘します。もちろん、このペルソナの用法は、劇を離れて現実の生活にも通用するようになります。そしてついに、ペルソナは行為の主体、権利の主体として「人格」の意味に転化します。つまり、「面」が「人格」そのものを意味するようになったわけです。

この論考の中で大切なのは、「面」を意味する「ペルソナ」が、劇における「役割」を意味する言葉になったという点ではあるまいか、と私には思われます。「役割」というのは、面と面が向きあうことによって生きてきます。つまり人と人との関係性の中に於て初めて「役割」が意味を持つのです。

その点に思いを致す時、自分の面（顔）の特質がはっきりします。自分自身の面は、自分に

は決して見えないのです。なるほど鏡に対する時はそれを見ることが可能です。しかし、厳密には左右反対に映った姿はそれがそのまま自分の面というわけにはいきません。想像力によって自分の面をイメージしているだけです。

「鏡をもたない通常の生活に於ては、自分と関わる相手の表情を読みとることによって自分の面を想像するのです。そういう点を考慮に入れますと、「面」は自分一人が孤独に生活している限りは、皮肉骨髓などの他の身体の部位と対等の関係にあると言えるでしょう。

「面」が重要なのは、他との関係に於てなのです。電車に乗って、向かい側に一列に坐した人々を見ます。それらの人々はおしなべて無表情な面相をしています。まさしく能面のような顔に見えます。電車の乗客たちは、あえて他との関わりを持つことを拒否しているがゆえにそうなるのでしよう。

このごろ、私の周辺で他人との関わりを持つことを苦手とする人が目立つようになって来ました。いうなれば「役割」をはたすことを自在にこなせない人たちです。これは、豊かさの中で生を受け、豊かな生活環境の中で、幼少期から大人になるまで、自ら積極的に他と関わりを持つとうと努力しなくても生きてこられたことが原因かもしれません。もっと端的に言えば、生きぬくための「役割」を分担しなのまま勉強だけをして、成人したことが問題なのです。或いは、テレビゲームやインターネットなどの機器を相手に育ったことがその大きな要因なのかもしれません。

ともあれ、人と人との関わりを持つことが苦手の人は、社会生活の中で「役割」をはたすことに尻込みします。そういう人の「面」は、必然的に美術館に展示された能面の相に近づくのではないかという気がします。

「この面授のあふにあへる自己の面目」つまり「このような面授に出会うことのできた自己の誇りに満ちた顔」というのは、よき師との関係性の中でこそ受けとめることが出来るのです。それを「役割」という視点から考えますと、師を師の「役割」と認めて尊敬し、自らを弟子の「役割」に徹底させて、師に完全服従する生き方が出来るようになることが大切だということになります。

皮肉骨髓、手足、それぞれに役割をはたす上で重要な働きをします。幼少の頃から、からだを使って農作業の手伝いをし、生きぬくための役割をはたしつつ成長した世代は、面授受面が比較的うまくいったのかもしれない。そういう意味では、社会的役割を自在にこなすことが困難な人が増えつつある現代は宗門でも面授受面がむずかしくなっているのはたしかです。

(つづく)

